

## 自転車保険 義務化の条例成立

兵庫県で全国初 10月から  
 自転車利用中に損害賠償保険の加入を義務づける条例が18日、兵庫県議会  
 本会議で全会一致で可決、成立した。条例は10月1日から施行され、保険加入の義務化は10月1日から罰則はない。条例は県内で自転車を利用する全ての人が対象で、未成年者の場合は保護者が、仕事で使う場合は企業が加入するよう義務づけた。販売店やレンタル店には購入者や利用者に加入の有無を確認するよう義務づけ、未加入なら加入を促すよう求める。また兵庫県は18日、繁華街などでも可決した。風俗営業法などで客引き行為を禁止する条例が初めて。条例では県内の繁華街の一部を「禁止地区」に指定し、客引きや客待ちなどを規制。禁止地区は神戸・三宮の繁華街などを想定している。10月から、中止命令などに従わない場合は5万円以下の罰料が科される。

**業種問わず客引き禁止条例も**

写真 138 「自転車の安全で適正な利用の促進に関する条例」制定を報じる新聞（朝日新聞 平成 27（2015）年 3月 19日）

県では、平成二十六年五月に、行政関係者や自転車販売業者などで構成する「自転車の安全な利用等に関する検討委員会」と「自転車保険専門部会」を設置した。県内では小学生が自転車で歩行者と衝突した事故で、保護者に多額の損害賠償を命じる判決があった。平成二十七年三月、「自転車の安全で適正な利用の促進に関する条例」が制定され、四月より施行された。罰則は設けていないものの、自転車利用者等に対する自転車損害賠償保険等への加入義務、また自転車小売業者等へは保険等への加入確認義務を課す条例は全国で初めてであり、後に多くの自治体が、類似する条例を制定する。

## 第二節 新時代に向けたひょうごの芸術文化

震災からおよそ一〇年がたち、復興も進む中、県では、平成十六（二〇〇四）年に策定された芸術文化振興ビジョンを二十七年に改定し、「芸術文化立県ひょうご」を目指した。実際、県では平成十七年にオープンした芸術文化センターの活動が本格化、佐渡裕<sup>さど ゆたか</sup>芸術監督の下、管弦楽団やスパーキッズ・オーケストラが目を見張る演奏会を次々と開き、短期間に長足の進化を見せている。

一 芸術文化立県ひょうごの展開

芸術文化振興ビ  
ジョン推進と改定

県が、芸術文化で人や地域を元気にする社会の実現を目指して平成十六年に策定した「芸術文化振興ビジョン」(第一期ビジョン)により、その後の一〇年間で、「心の復興」

のシンボリック的存在・芸術文化センターをはじめ、兵庫陶芸美術館や考古博物館、横尾忠則現代美術館よこおただのりが開館するなど、芸術文化の拠点となる施設整備が進んだ。加えて新進・若手芸術家を応援する「ひょうごアーティストサロン」の設置や、兵庫芸術文化センター管弦楽団のアウトリーチ活動、中学生を対象とした「わくわくオーケストラ教室」や「ピッコロわくわくステージ」など、新たな事業展開が生まれた。一方、この間、芸術文化を取り巻く環境も大きく変化した。本格的な人口減少や少子高齢化の進展などにより、芸術文化に

触れる機会の偏在や、地域文化の継承などが課題になった。また、情報通信技術の発展により、内外への芸術文化情報の発信や、芸術文化を生かしたまちづくりなどに期待が高まった。

こうした状況を踏まえ、県は、平成二十七年に「芸術文化振興ビジョン」を改定した。その際、県民モニターや関係芸術文化団体等へのアンケート調査、学識経験者・芸術文化関係者・公募委員らで構成する「芸術文化振興ビジョン検討委員会」での意見・提言を基にした。基本の目標と方向性は維持しつつ①県民誰もが身近に芸術文化に親しむ環境の充実、②ふるさと意識に根ざした兵庫の文化の継承・発展、③兵庫の分厚い文化力の国内外への積極



写真 139 県立芸術文化センター内部

的な情報発信、④芸術文化施設の適切な維持・保全と活性化の推進―の四つの重点項目を新たに設定し、兵庫の文化力を生かした多彩な取組の展開を目指した。第Ⅰ期ビジョンで示された二一世紀社会での芸術文化の果たす役割の重要性を深く自覚しながら、引き続き「芸術文化立県ひょうご」を掲げ、重点項目を明確に示して「県民の暮らしに息づいた芸術文化が人や地域を元気にする社会の実現」を狙った。

文化芸術振興基本法の一部を改正する形で新たに「文化芸術基本法」が平成二十九年六月に公布・施行された。旧振興基本法が平成十三年に議員立法により成立後一六年が経過し、政府は新たな文化芸術振興に取り組んだ。一方で少子高齢化・グローバル化の進展など社会状況が著しく変化する中で、幅広い関連分野との連携を視野に入れた「総合的な文化芸術政策」の展開が一層求められた。

今回の改正は、文化芸術そのものの振興にとどまらず、観光・まちづくり・国際交流・福祉・教育・産業とその他の関連分野の施策を本法の範囲に取り込み、文化芸術により生み出される様々な価値を文化芸術の継承・発展と創造に活用するのが狙いであった。また、文化芸術団体の果たす役割が明記され、国・独立行政法人・文化芸術団体・民間事業者等の連携・協働についても新たに規定された。

具体的な基本的施策として、「伝統芸能の例示に組踊が追加され、「食文化の振興」「芸術祭の開催支援」「高齢者及び障害者の創造的活動等への支援」などが明記された。このほか、文化芸術に関する施策の総合的・計画的な推進を図るため、政府は「文化芸術の振興に関する基本的な方針」に代わり、新たに「文化芸術推進基本計画」を策定すること、関係府省による「文化芸術推進会議」を設けることなどが規定された。また改正法の附則で、政府は文化庁の機能拡充等について、行政組織の在り方を含めて検討し、必要な措置を講

ずることとされた。

芸術文化センター  
の本格的展開

県立芸術文化センターの専属オーケストラとしてオープンと同時に誕生した兵庫芸術文化センター管弦楽団（PACオケ）は、芸術監督・指揮者に佐渡裕が着任して以来、コ

アメンバー四八人という中規模の編成ながら、室内楽から交響曲を含む大編成管弦楽曲やオペラまで多様な演目を精力的に披露し、国内外から注目された。プロの楽団であると同時に「アカデミー」の要素も持つ日本唯一の存在として、その後もユニークな活動を続け、進化している。

同管弦楽団の下部組織に当たるのが、弦楽編成のスーパーキッズ・オーケストラ（SKO）で、同センターのソフト先行事業として、開館に二年先立つ平成十五年、音楽好きの小学生から高校生まで二一人で結成し、

十一月十四日、明石市民会館で初めて演奏会を開いた。PACオケとは別に、佐渡が全国からトップクラスの技術を持つジュニア演奏家を厳選しオーディションで選考、音楽ができる幸せを子どもたちと共有しつつ演奏力を磨き、「世界で一番輝くオーケストラ」を目指す。三〇〜四〇人の弦楽編成による活動は幅広く、同センターのほか県内各地以外の、事故や災害に見舞われた被災地域への慰問も多い。

兵庫芸術文化センター管弦楽団では、本格的なクラシック演奏会やファミリー向けのコンサートのほか、同管弦楽団が発足した翌年から、兵庫県内在住の中学一年生全員を対象とした青少年芸術体験事業「わく



写真 140 県立芸術文化センターのステージで演奏するスーパーキッズ・オーケストラ



写真142 にしきた音楽祭ポスター(平成18年)(西北活性化協議会提供)

たりするデータもあり、センターと地元商店街の活性化への取組が、地域の社会的・経済的評価を向上させたものとみられる。

**芸術文化活 動の展開**

兵庫県内で芸術文化活動に携わる主に新進・若手のアーティストを応援する目的で、平成十八年六月「ひょうごアーティストサロン」が誕生した。アーティストの要望に応じ、専門の芸術文化コーディネーターがアドバ



写真141 青少年芸術体験事業「わくわくオーケストラ教室」(加東市立滝野中学校提供)

にぎわいづくりに貢献してきた。観客の約六割が公演前後に周辺で飲食やショッピングをしたり、周辺商店の約半数で公演日に売上・集客が増加したりするデータもあり、センターと地元商店街の活性化への取組が、地域の社会的・経済的評価を向上させたものとみられる。

より、音楽芸術の裾野が確実に広がっている。

芸術文化センター開館の翌年四月、センターを核とした地域全体の発展を目的に、芸術文化センターとアクタ西宮振興会・にしきた商店街の三団体が中心となって、西北活性化協議会を発足させた。市内の大学生や周辺の自治会の参加も得て、公演関連や開館記念、あるいはクリスマスなど様々なイベントを開催している。参加者数が年々増加するなど、地域の

わくわくオーケストラ教室」を開催している。「多感な時期の子どもたちに生のオーケストラを聞かせたい」との佐渡の熱い思いから、芸術文化センター大ホールに生徒らを招待し、年間四〇公演が行われている。佐渡が狙ったように、こうした地道な活動を積み重ね、種をまき続けることに



写真 143 伝統文化体験フェスティバル

イスを行い、幅広く関連情報や発表の機会を提供するとともに多彩な分野や幅広い年齢層の芸術家との出会い・ふれあい・語らいの場など交流の拠点としても利用されている。具体的には、サロンの主催事業として、毎月、会館ロビーコンサートや新進芸術家育成プロジェクト・リサイクルシリーズを開催するほか、県美術作家交流展を年一回催し、ひょうごアートイストサロン賞を贈呈している。また「さわやかステージ」として県内のイベントへの出演調整等も行っている。

芸術振興は伝統文化にも及ぶ。「なつかしいけれど、アタラシイ 日本文化の魅力再発見！」の触れ込みで、伝統文化の新たな担い手の発掘を目的に、その魅力を多面的に紹介する「伝統文化体験フェスティバル」が平成十八年度に始まり、第一回が十九年三月三・四の両日、兵庫県公館で催された。県域の文化団体などの協力を得て、いけばな・書道・工芸などの体験ブースや日本舞踊・能・邦楽のステージなどバラエティーに富んだ内容で実施され、平成三十年度まで一三回行われた。

地域の芸術文化活動を推進する「ふるさと芸術文化発信サポート事業」が平成十八年に始まった（二十九年度から「ふるさと文化の伝承・発信サポート事業」）。伝統芸能や生活文化、郷土の歴史にまつわる人物や伝承など、地域固有の魅力的な文化資源を生かし、地域の文化団体や住民らが主体となって実施する芸術文化活動の立ち上げのサポートが狙いであった。地域住民らが参画する芸術文化団体・実行委員会・グループなどが実施する地



写真 144 神戸ビエンナーレで注目された現代アート「アート イン コンテナ展」(神戸市提供)

域に根差した伝統文化に関する事業について、当該事業の発信・発表に先立って必要な準備経費や発信・発表に直接要する経費に対して補助する制度で、平成三十年度までの一三カ年度で計三一九件に総額五三三五万円を交付した。

震災後一〇年を機とした平成十六年十二月の「神戸文化創生都市宣言」を受け、神戸に芸術文化の力を結集・発信し、更なる振興を図り、まちのにぎわいや活性化につなげようと、二年に一度の芸術文化の祭典「神戸ビエンナーレ2007」が開催された。神戸ビエンナーレ組織委員会と神戸市が共催し、兵庫県や文化庁など一七団体が後援し、「出合い／人・まち・芸術」をテーマに平成十九年十月六日～十一月二十五日の五日間、神戸市中央区波止場町の神戸メリケンパークで開かれた。内容は、現代アートの「アート イン コンテナ展」や海外招待作家展をはじめとした常設展示と、いけばな・陶芸・日本画・洋画・写真・書・工芸などの各種展示を柱として、チャペルコンサートやアートワークショップ・大道芸・音楽ステージなど多彩なイベントを繰り広げた。

神戸ビエンナーレの特徴の第一は、対象が現代アートに限らず、いけばなや書のような日本の伝統芸術やデザイン、ファッションなど多岐に及ぶ点にある。

加えて、従来はあまり取り上げられなかった大道芸や児童絵画、洋菓子デザイン、コミックイラストなどの現代文化をも取り込む。こうし



写真 145 県立考古博物館

た多様性により、多くの芸術文化の窓口となって発展した神戸の港都らしさを表現しようとした。第二に、広く一般から国際コンペティション形式で作品を選出している点である。世界的に多数開催される「著名芸術家らによるビエンナーレ」の定形に捉われず、若手アーティストの発掘及び育成にウエイトを置いた。しかし「阪神・淡路大震災の復興を芸術面で支援してきたが、寄付金が減少するなど一つの区切りを迎えた」（久元喜造神戸市長）として、平成二十七年開催の第五回をもって神戸ビエンナーレは終了した。

#### 新たな文化施設の開設

平成十九年十月、遺跡数全国一位の兵庫県を考古学の視点でアピールする拠点として「県立考古博物館」が播磨町大中の国史跡「大中遺跡」の隣接地に誕生した。同史跡は、整備されて「播磨大中国古代の村」の愛称で親しまれる大中遺跡公園となっているが、公開・管理の役割を担う同博物館は、従来のような「展示物主体」ではなく、来館者の誰もが、いつでも、どこでも博物館の活動に主役として参加できる「参加体験型博物館」を目指した。「ネットワーク」「参加体験」「変化・成長」をキーワードに、県内の遺跡から出土した考古資料を活用した様々な事業を県内全域で展開する。

県立考古博物館がオープンした一〇年後の平成二十九年四月、加西市豊倉町飯森の県立フラワーセンター敷地内に、同市在住の美術品収集家・千石唯司（せんごくたし）から寄贈された、中国の夏から宋にかけての古代鏡約五〇〇点を展示する施設「古代鏡展示館」が、同博物館分館の形で開館した。美術的歴史的価値の高い作品が数多く含まれ、質・量ともに





写真 146 横尾忠則現代美術館

充実した、中国の古代文化を知る上で極めて重要な資料である（第八章第三節七参照）。

西脇市出身の美術家・横尾忠則からの寄贈・寄託作品を保管・展示する「横尾忠則現代美術館」が平成二十四年十一月、神戸市灘区原田通の兵庫県立美術館王子分館西館をリニューアルする形で開館した。同分館は、昭和四十五（一九七〇）年にオープンした、建築家・村野藤吾設計の旧県立近代美術館の建築的価値を重視し、平成十四年に貸し館「原田の森ギャラリー」（本館・別館・東館・西館）として再活用したもの。うち西館を平成十五、二十四年の改修を経て充てられた横尾忠則現代美術館は、国際的に高く評価される横尾芸術の魅力を国内外にアピールし、横尾と関わりのある多様な分野のアーティストや、横尾作品に関連するテーマ展など、多彩な展覧会を催す。通常の展示・保存機能のほか、アーカイブルームでは、膨大な関連資料の保管・調査・研究を行っている。

平成三十年七月、神戸市兵庫区の新開地に四二年ぶりに復活した演芸場として、「喜楽館」が開館した。湊川の付け替えに伴って明治末、旧河川敷に誕生した歓楽街で、戦前には「東の浅草、西の新開地」とうたわれる神戸随一の演芸の街であったが、戦後も残っていた神戸松竹座が昭和五十一年に閉鎖されて以降、常設の寄席は無くなっていた。平成二十六年夏、上方落語協会会長であった桂文枝かつらぶんしの「神戸辺りにも上方落語の定席を」との発言を知った新開地商店街の若手が同会長に送った一通の手紙が、寄席「喜楽館」実現の第



写真 147 神戸新開地・喜楽館のオープニングセレモニー（平成30年7月）（新開地まちづくりNPO提供）

一歩となった。

演芸場の名称は一〇〇〇通を超える応募の中から「神戸新開地・喜楽館」を選び命名した。「和」のイメージがある上方落語の殿堂「満天神繁昌亭」（大阪市北区）に対して、新開地では気軽に楽しめて神戸らしい「洋」につながる、かつて神戸市民に愛された聚楽館から「館」を使った。

平成三十年七月のこけら落とし特別公演には上方落語協会相談役の落語家・笑福亭鶴瓶が出演してトリを務め、公演最終日は桂春団治が大トリで締めくくった。喜楽館の発足以来、昼は上方落語の定席、夜は東西落語・講談・浪曲などの演芸のほか音楽やダンスなど、幅広く楽しめる演芸場として市民に親しまれている。

## 二 古きをたずねて新時代へ

### 新たな文化財等の発見

平成二十七年四月、南あわじ市松帆周辺から採取したとされる砂の中から銅鐸七点が見つかった。砂を運搬中のブルドーザーのオペレーターがまず二点（一・二号）を発見し、次いで同市教育委員会が資材置き場などを調査して残り五点（三〜七号）を見つけ出した。発見された数では、島根県加茂岩倉銅鐸の三九点、滋賀県大岩山銅鐸の二四点、神戸市桜ヶ丘銅鐸の一四点に次ぐ四番目となる。今回見つかった「松帆銅鐸」の最大の特徴は、全て弥生時代前期〜中期（約二二〇〇年前）に製作された「古い段



写真 148 「数十年に一度の大発見」と注目された松帆銅鐸（南あわじ市提供）

階」に分類できることであった。中でも一号銅鐸が最も古い段階の「菱環鈕式」で、全国でもまだ一・二点しか発見例はない。また七点のうち五号を除く三組六点は、大きい銅鐸の中に小さい銅鐸を納める「入れ子状態」だった点にも注目される。

X線CTスキャンにより、銅鐸の入れ子とともに、中から吊り下げて鳴らすための棒「舌」が入っている事実も判明し

た。銅鐸と舌が共に見つかる事例が極めてまれである上、「舌を吊り下げて使っていた状態」で入れ子にしていた点や、さらに「舌」や銅鐸の吊り手「鈕」に吊り下げるための紐や紐の痕跡が残っていた点も注目された。これまで「謎の多い遺物」と位置づけられていたが、舌と紐が銅鐸とセットで発見されたことにより一九八〇年代からあった「初期銅鐸Ⅱ聞く銅鐸説」が証明された。松帆銅鐸が「数十年に一度の大発見」と言われるゆえんである。今回発見分を合わせると兵庫県内での銅鐸の出土数は全国一の計六八点となった。

考古学的遺物や化石の発見は、公的な発掘調査ではなく、時にアマチュアの愛好家による場合があり、世間を驚かせる。古くは昭和二十一年群馬県岩宿遺跡の例が著名であるが、その六〇年後の平成十八年八月、丹波市で見つかった「丹波竜」も驚きをもって迎えられた。丹波市山南町上滝の加古川水系篠山川の川峡谷の川床で一億四〇〇〇万年〜一億二〇〇〇万年前の白亜紀前期の地層から、当時生息していた竜脚類の大型草食恐竜ティタノサウルス形類とみられる化石が発見された。体長十数メートルと推測され、国内最大級



写真 149 丹波市立丹波竜化石工房「ちーたんの館」

と言われる。同市在住のアマチュア愛好家二人が地質調査をしていたところ、折り重なる篠山層群の赤茶けた泥岩層の表面から約一五センチの正体が分からない二本の物体を抽出した。翌日から二日をかけて交代で掘り進められ、六〇センチほどの棒状と、ひと塊の化石らしき岩石が発掘された。県立人と自然の博物館の鑑定で「恐竜の肋骨」と判明した。

化石が発見された翌年の一月から、発見現場上部に重なる砂岩・礫岩層を取り除く掘削工事に続き、手掘り作業を進めると、恐竜の血道弓、尾椎びつとみられる連なった化石数十点がまとまった状態で出土した。恐竜化石の尾椎が原型のまま連なって出土するのは日本で初めてであった。恐竜頭部の発見は国内七例目、竜脚類では初めてで、体の骨と頭部の同時発見も世界的に珍しい。

平成二十六年八月、愛称「丹波竜」に新属新種「タンバティタニス・アミキティアエ」の学名が与えられた。命名は産出地「丹波」と、ギリシャ神話の女巨人「ティタニス」、発見者二人の友情を意味するラテン語の「アミキティアエ」を組み合わせた。前期白亜紀の同形類は発見数が少なく、世界レベルで情報が不足する中、丹波竜の持つ様々な特徴が、同形類の進化の解明に役立つものと注目される。

平成十九年一月、丹波市は特許庁に「丹波竜」の商標登録を出願し、「恐竜を活かしたまちづくり課（後に恐竜課）」を発足させ、五月からは「恐竜化石保護条例」も施行した。十二月になると、丹波竜化石のクリーニ



写真 150 民謡に乗せて歌い継がれる「デカンショ祭」の踊りの輪（デカンショ祭実行委員会提供）

ング作業の見学施設として市立丹波竜化石工房「ちーたんの館」を建設するなど、観光客誘致へ矢継ぎ早に手を打った。

### 日本遺産認定

文化庁は平成二十七年に「日本遺産」を創設し、第一期として全国の一八件を選定した。同遺産は「地域の歴史的魅力や特色を通じて、我が国の文化・伝統を語るストーリーを認定するとともに、ストーリーを語る上で不可欠な魅力ある文化財群を総合的に整備・活用し、国内外に発信することで、地域の活性化を図る」制度で、平成三十年年度までに六七件の文化財群が認定された。このうち兵庫県が関係する遺産は、認定順に①丹波篠山デカンショ節、②国生みの島・淡路、③播但貫く、銀の馬車道 鉱石の道、④きつと恋する六古窯、⑤北前船寄港地・船主集落であった。

「日本遺産」の第一期に認定された「丹波篠山デカンショ節―民謡に乗せて歌い継ぐふるさとの記憶―」は、〰丹波篠山 山家の猿が 花のお江戸で芝居する…の歌い出しで全国的に知られる民謡であるが、副題の「歌い継ぐふるさとの記憶」に地元住民の思いがこもる。単に江戸時代後期から二〇〇年の長きにわたり伝統を保持しているだけでなく、地域や時代ごとに現代まで風土や人情・名所・名産を次々と歌い込みながら膨大な叙情詩を創り上げた点が重要で、その歌詞の総計は実に三〇〇番を超える。毎年八月十五・十六の両日に行われる「デカンショ祭」<sup>まつり</sup>では、生歌・生演奏に合わせ、篠山城跡三の丸広場に高く組み上げられ



写真 151 伊弉諾尊・伊弉冉尊を主祭神とする  
伊弉諾神宮（伊弉諾神宮提供）

た木造ヤグラを、踊りの輪が幾重にも取り囲み、数千人もが踊る。

平成二十八年四月には、淡路島の洲本・南あわじ・淡路の三市が申請したストーリー「『古事記』の冒頭を飾る『国生みの島・淡路』——古代国家を支えた海人の営み——」が「日本遺産」に認定された。日本最古の歴史書『古事記』に見える「国生み神話」では、伊弉諾尊・伊弉冉尊の二柱の神により「おのころ島」がつくられ、夫婦となって日本列島の島々を生んでいく。その中で最初に生まれた島が淡路島であると記されている。淡路が「特別な島」と意識されたのには理由がある。もともと盛んであった稲作が本格化するとともに社会構造の大変革が始まる弥生時代は、新時代の幕

開けを告げる金属器文化、とりわけ青銅器文化に代わり、畿内に先駆けて鉄器を生産する鍛冶工房があった先進地。後には、塩づくりや巧みな航海術により、畿内の王権や都の暮らしを支えた「海人」と呼ばれる海の民の存在があった。

平成二十九年に「日本遺産」に認定されたのは、近代日本を支えた産業遺産「播但貫く、銀の馬車道 鉱石の道——資源大国日本の記憶をたどる七三キロメートルの轍——」。但馬南部の朝来市の生野鉱山と姫路市の飾磨港の間で、採掘された鉱物や資材を届ける馬車が行き交った全長四九キロの道は、明治九（一八七六）年に完成した日本初の産業道路「生野鉱山寮馬車道」である。かつて「佐渡（新潟県）の金」と並び称された「生野の銀」に加え、周辺には「銅の神子畑・明延、金の中瀬」の鉱山が広がっており、鉱山群をつなぐ



写真 153 県史跡の「丹波焼古窯跡」の一つで丹波焼発祥の地とされる「源兵衛山古窯跡」（丹波篠山市提供）



写真 152 かつて東洋一を誇った神子畑選鉱場跡（朝来市提供）

に位置する。

焼発祥の地とされる「源兵衛山古窯跡」と呼ばれ、小字武士ケタの山麓

杭周辺の丘陵に点在する。中でも三田市と境界を接する三本峠は、丹波

元が受け継ぐ。兵庫県史跡の「丹波焼古窯跡」が四斗谷川下流域の下立

ぼ同時期に取り入れられた伝統技法「足で蹴るろくろ」を約六〇軒の窯

る大規模な登り窯が定着すると、大量生産が可能になった。登り窯とほ

も呼ばれ、平安時代末期から鎌倉時代初めの発祥とされる。桃山時代まで

常滑焼と瀬戸焼の六カ所であるが、このうち丹波焼は、地名から立杭焼と

本育ちのやきもの産地」が認定された。中世から現代へ連続と続く日本

などが今も残り、近代日本の発展を支えた歴史を伝える。

二四キロもの「鉱石の道」には、東洋一を誇った朝来市の神子畑選鉱場跡



写真 154 帆布の開発や築港技術を誇った工業松右衛門の旧宅（高砂市提供）

兵庫津を根城に「海を行く総合商社」さながら巨万の富を築いた。北前船が繁栄をもたらした寄港地や船主集落が各地に残る中、兵庫県は唯一、瀬戸内にも日本海沿岸にもゆかりを持つ。瀬戸内の高砂市には、船の開発や築港技術を誇った工業松右衛門の旧宅が、日本海側の新温泉町の為世永神社には、船乗りらが航海安全を祈願して奉納した船絵馬などが残る。

「日本遺産」には、さらに広域エリアに及ぶものもある。平成二十九年に認定された「荒波を越えた男たちの夢が紡いだ異空間―北前船寄港地・船主集落―」である。平成三十年には、瀬戸内から日本海沿岸を経て北海道に至る計一五道府県三八自治体が名を連ね、兵庫県では神戸・高砂・赤穂・洲本市と新温泉町が連携した。翌年には姫路・たつの両市が加わった。北前船は、主に日本海で売買する「買い積み」船として、当初は近江商人が主導権を握ったが、後に船主が直接交易した。江戸時代中頃から明治時代にかけて、「北前船」が上方と蝦夷地を結び、海上物流の大動脈の役割を果たした。商才にたけた船持ち船頭の高田屋嘉兵衛（淡路島出身）らは、